

10 イタリアの日本研究

——文化の多様性を生かす——

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ

1. イタリアと日本との交流

おそらく、ヨーロッパのなかで、最初に日本という国について言及したのは、イタリア人、ヴェネツィア共和国の商人マルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) であろう。彼の口述に基づく旅行記『東方見聞録 (*Il Milione*)』においては、日本を指す Cipangu / Cipango (チパンゲ)、Zipangu (ジパンゲ) に関する記述があり、ヨーロッパに広く普及して、写本だけでも 150 種類があり、印刷本は数え切れないほどあった。

日本とイタリア人の最初の接触は戦国時代に入ってから、主にキリスト教の宣教師を通してである。日本で活躍したイタリア人宣教師としては、イエズス会のオルガンティノ・ネッキ・ソルディ (Organtino Gneccchi Soldi, 1533-1609) やアレッサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano, 1539-1606)¹ が有名である。とくにヴァリニャーノ巡察師は、1581 年にイエズス会員のための宣教ガイドライン *Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone* (日本の風習と流儀に関する注意と助言) を著し、*Sumario de las cosas de Japón* (日本諸事要録、1583) と *Adiciones del sumario de Japon* (日本諸事要録補遺、1592) を収める『日本巡察記』とともに、未完の *Historia del Principio y Progreso de la Compañía de Jesús en las Indias Orientales* (1542-64) や *Del principio y progreso de la Religion Christiana en Japon* (1601) などの大作も著わした。ルイス・フロイスとジョアン・ロドリゲスの著書と並び歴史に残るものである。また、1582 年 (天正 10 年) に、九州戦国大名が 4 人の少年使節をローマ教皇のもとに派遣した「天正遣欧少年使節」を発案・実施した人物でもある。イタリアを中心に、少年使節団への反響を記した書物 (例えば、Guido Gualtieri, *Relazioni della venuta degli Ambasciatori*

1 Centro Internazionale Alessandro Valignano アレッサンドロ・ヴァリニャーノ国際研究所ウェブサイト (<http://www.valignano.org/jp/bibliografia>) と A. Boscaro, *Ventura e sventura dei gesuiti in Giappone (1549-1639)* (Venezia: Cafoscarina, 2008) を参照。

Giaponesi a Roma..., Zanetti, 1586) も数多く発行されたようである。

なお、宣教師や商人などの記録、報告、言述・書簡などに基づいて、16、17世紀のヨーロッパで出版された日本に関する書籍は、主にラテン語かイタリア語で書かれたもので、多数多彩であった。ルネサンス時代、ヨーロッパに出回る書籍のおよそ半分がヴェネツィアで印刷されていた²。

また、仙台藩主伊達政宗の命により支倉常長を正使とした慶長遣欧使節は、1615年1月30日（慶長20年1月2日）にエスパーニャ国王フェリペ三世に謁見した後、ローマに至り、1615年11月3日にはローマ教皇パウルス5世に謁見した。天正使節ほどの盛大な反響ではなかったにせよ、記録のみならず、ヴェネツィア共和国の元首に委託されてドメニコ・ティントレット（Domenico Tintoretto, 1560-1635）が伊東マンショの見事な肖像画を残したと同じように、アルキータ・リッチ（Archita Ricci, 1560-1635）による豪華な『支倉常長像』（1615年、ローマのボルゲーゼ美術館蔵）も残っている。

その後、日本は禁教令を敷いて鎖国の時代になったにもかかわらず、1643年（寛永20年）にジュゼッペ・キアラ（Giuseppe Chiara, 1603-1695）、そして1708年（宝永5年）に（イエズス会宣教師ではないが）ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ司祭（Giovanni Battista Sidotti / Sidoti, 1668-1714）というイタリア人が密入国し、捕らえられて悲惨な結末を迎える。しかし、キリスト教布教のために来日したシドッティ司祭への審問に基づいて、新井白石が『西洋紀聞』（1715年頃完成）を筆記し、それが1807年以来広く流布されるようになり、鎖国下の日本における世界認識に大いに役立った。

17世紀の半ばにイタリア人イエズス会士ダニエッロ・バルトリ（Daniello Bartoli, 1608-1685）の大著 *Istoria della Compagnia di Gesu*（イエズス会史）は、徐々にアジア編（1653年版）、日本編（1660年版）、中国編（1663年版）、イギリス編（1667年版）、イタリア編（1673年版）の発行を得て、イタリア文学のなかでも17世紀の名著とされた。未完の *Il Giappone*（1660年版、5冊2巻）も幅広く普及し、愛読された書籍となったようである。このように、このころまで、イタリア人は日本に関する知識を宣教師の書いた書物だけを介して得ていたのであるが、また、日本に興味を持つようになったのは、19世紀後半、統一王国になってからである。

2 Sonia Favi, "Self through the Other: Production, Circulation and Reception in Europe of Written Sources on Japan in the Christian Century," PhD thesis. Venice: Ca' Foscari University of, 2013, pp. 196-211.

<http://dspace.unive.it/handle/10579/3061>

しかし、近代になってから日本との関係が強くなった最初のきっかけは政治と貿易である。独立国家になったばかりの当時のイタリアには養蚕業と関連した紡績業などが、国の最も重要な産業のひとつで、ヨーロッパの中で生糸・絹織物の生産量の多い輸出国であった。しかし、1854年頃から、蚕の伝染病が流行したことにより、養蚕製糸業に大きく依存するイタリアの経済は致命的な打撃を受けてしまったのである。1860年代の初めから、イタリアの蚕種仕入人・業者は、伝染病に感染していない健康な蚕種を求めて、ベンガル、中国などへ探しに出たが、健康な蚕種が存在する唯一の国は、開国したばかりの日本であった。日本の蚕種の質は極めて良好だったため、1860年代に日伊蚕種貿易の規模は徐々に拡大し、イタリアは日本にとって産業上、最も重要なパートナーとなったのである³。

この状況は日伊外交関係に影響をおよぼし、1866（慶応2）年に日伊修好通商条約が締結された。1867年から、イタリアと日本は本格的に国交を始め、公使と領事が日本に派遣された。実は当時、日本在住のイタリア外交担当者であったアレッシンドロ・フェ・ドスティアーニ伯爵の家族も蚕種貿易に携わっていた。イタリア海軍大尉ヴィットリオ・アルミニョン（Vittorio Arminjon）は、1866年に、イタリア使節として日本に赴き、日伊修交通商条約に調印し、1869年に、ジェノヴァで著書 *Il Giappone e il viaggio della corvetta Magenta del 1866*（『幕末日本記』）を刊行した⁴。明治政府が1873年に派遣した岩倉使節団は、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ヴェネツィア、ミラノなどを視察し、各地で歓迎され、その見聞を『米欧回覧実記』（1878年版）にまとめている⁵。

19世紀後半、ジャポニズム（Japonisme）はイタリアでも広がり、日本の美術品の収集家が次第に増えていった。イタリアの場合、主にお雇い外国人として日本を訪れたイタリア人を中心に、日本美術の重要なコレクションが生まれた。東京の大蔵省紙幣局を指導し、日本の紙幣切手印刷の基礎を作ったエドアルド・キョッソーネ（Edoardo Chiossone, 1833-98）コレクションを収蔵するジェノヴァの

3 経済史の展望からこの時代の日伊貿易についての諸論文は元ピサ大学のクラウディオ・ザニエル Claudio Zanier による。R. Caroli, 1868. *Italia Giappone: intrecci culturali* (Venezia: Cafoscarina, 2008).

4 Teresa Ciapparani, “Al Giappone: scritti di viaggiatori italiani, o in italiano, da metà Ottocento alla fine del periodo Meiji,” in Studi in onore di Cosimo Palagiano. Valori naturali, dimensioni culturali, percorsi di ricerca geografica, a cura di Emanuele Paratore, Rossella Belluso (Roma: EDIGEO, 2013).

5 岩倉翔子編『岩倉使節団とイタリア』京都大学学術出版会、1997年。

キョッソーネ東洋美術館、イタリアのブルボン＝パルマ家の公子エンリコ・ディ・ボルボーネ＝パルマ（Enrico II Borbone-Parma, 1851-1905）が妻と世界一周の旅（1887-1889年）の途中、東洋、日本で買い集めたコレクションからなるヴェネツィアの東洋美術館、イギリス人の父、イタリア人の母をもつフレデリック・スティッベルト（Frederick Stibbert, 1836-1906）が熱心に収集した武器武具などのコレクションと豪邸からなるフィレンツェのスティッベルト美術館、東京芸術大学の前身である東京工部美術学校で教授した彫刻家ラゲーサ（Vincenzo Ragusa, 1841-1927）のコレクションなどを所蔵しているローマのピゴリーニ民族博物館などがある。

2. イタリアの日本研究の歴史

上記の動きは、イタリア人研究者と、研究機関である大学や日本語教育などにも影響を及ぼした。イタリアにおける日本語教育は、19世紀後半、フィレンツェの国立高等学校に日本語講座の開設から始まる。この時から20世紀の初めにかけて、ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学の前身であるヴェネツィア商業高等学校、ローマ大学、ナポリ東洋学院（現ナポリ大学の「オリエンターレ」）など、現在日本語学科のある主な大学で次々に日本語講座の開設が進められた。

フィレンツェでは、アンテルモ・セヴェリーニ（Antelmo Severini）が初めて日本語講座を開設し、1866年に『日本語会話』のイタリア語版を出版している。ヴェネツィアでは、カ・フォスカリ大学の日本語講座の開設が1873年で、アゴスティーノ・コッティン（Agostino Cottin）著 *Nozioni sulla lingua giapponese: Lettura accademica*（日本の基礎知識）の出版は1886年で、イタリア語による最初の日本語文法書のようなものである。ジュリオ・ガッティノーニ（Giulio Gattinoni）は1890年に *Grammatica Giapponese della lingua parlata*（日本口語文典）を、1908年に *Corso completo di lingua giapponese*（日本語講座）を上梓している。翻訳家バルトロメオ・バルビ（Bartolomeo Balbi）は1911年に *Piccolo vocabolario-manuale italo-giapponese*（伊和実用宝鑑）を、作家で語学者のピエトロ・シルヴィオ・リヴェッタ（Pietro S. Rivetta）は1912年に *Les cent caracteres "hiragana": les plus employés au Japon*（平假名百字）を刊行している。

アンテルモ・セヴェリーニは、ロドヴィコ・ノチェンティニ（Lodovico Nocentini）とともに、日本の文学作品をイタリア語に訳し始めた人である。その後、ナポリで教え、詩人やダンウンツィオや政治家ムッソリーニと親交のあった詩人下位春吉（1883-1954）は文芸誌 *SAKURA* で、日本文学の数作品を紹介したこと

がある。カトリックの宣教師で、サレジオ会の神父として1929～47年、1959～74年に日本に滞在したマリオ・マレガ（Mario Marega）は戦前、『古事記』『忠臣蔵』の伊訳などを刊行したことがある。戦後になってから、マリオ・テティ（Mario Teti）と作家須賀敦子（1929-98）も日本の近現代文学（川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫、安部公房など）の翻訳に大きく貢献した。日本文学史、日本演劇史などについて著書を刊行したマルチェッロ・ムッチョーリ（Marcello Muccioli）教授は、イタリアの日本古典文学の翻訳と研究の中心的な人物であった⁶。また、黒澤明をはじめ、日本映画を紹介しながら、ムッチョーリの後を継いだのは、ジュリアーナ・ストラミジョーリ（Giuliana Stramigioli）である⁷。翻訳だけではなく、日本文化に関する研究も始まり、文学、芸術、民族学、歴史、哲学と宗教などについての研究書も徐々に出版され始めた⁸。

日本との文化交流は、20世紀前半になって盛んになった。1897年に日本の美術協会は、1895年から開催された世界最古の国際美術展覧会ヴェネツィア・ビエンナーレに初めて出展して広い反響を呼ぶ⁹。1911年にローマで開催された博覧会にも日本絵画が展示され、日本画は文学評論家エミリオ・チェッキ（Emilio Cecchi）等によって評価された。その後、1930年にもまたローマのパラッツォ・デッレ・エスポジツィオーニ・ディ・ベッレ・アルティの展示場にて大規模な日本美術展覧会が開催された。ムッソリーニ政権の支援によって実現されたこの展覧会は、大倉喜七郎男爵の主催で、画家横山大観（1868-1958）が日本芸術使節の役を担当し、西洋初の大規模な日本美術展であり、後に「ローマ展」という名で知られるようになった。

日本の職人たちの手によって改装された本格的な日本様式の展示空間の中で、展示作品の多くは近代日本画の傑作で、当時の日本・イタリア両側のマスコミに大きく取り上げられ、大成功を収めた。また、1929年に日本画の本質を説く書

6 M. Muccioli, *La letteratura giapponese* (Roma: L'asino d'oro, 1969, 2015); *Il teatro giapponese, Storia e antologia* (Milano: Feltrinelli, 1962).

7 Andrea Maurizi, Teresa Ciapparoni La Rocca, (a cura di), *La figlia occidentale di Edo. Scritti in memoria di Giuliana Stramigioli* (Milano: Franco Angeli, 2012).

8 A. Boscaro, *Narrativa giapponese: cent'anni di traduzioni* (イタリア語になった日本文学) (Venezia: Cafoscarina, 2000).

9 日伊交流450年の歴史についての多彩な研究を集めた論文集は、下記の書籍を参照されたい。A. Tamburello (a cura di), *Italia-Giappone: 450 anni*, Vol. 2 (Roma-Napoli: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, Roma-Napoli, 2003). 明治期日伊交流史について石井元章の研究をご参照。Motoaki Ishii, *Venezia e il Giappone: Studi sugli scambi culturali nella seconda metà dell'Ottocento* (Roma: Istituto nazionale d'archeologia e storia dell'arte, 2004); A. Boscaro and M. Bossi, *Firenze, il Giappone e l'Asia Orientale* (Firenze, 1999).

物 *Ars Nipponica* (日本の美術) も限定部数で発行され、特にロベルト・パピーニ (Roberto Papini) の批評は、イタリアの日本美学の解釈法を示す画期的な参考書になった¹⁰。また、リヴェッタが書いた *La pittura moderna giapponese* (日本の近代絵画、1930年) は、一般のイタリア人に日本文化に対する知識を普及させた。

1939年には日伊文化協定が結ばれたが、この時期のイタリアの日本研究は、日伊両国の政治と密接に関連していた。大戦後、政治的関係からは解放され、イタリアの日本研究はますます盛んになる一方であった。現在、日本語専攻課程をもち、日本語の学位が取得できる大学は、ヴェネツィア、ローマ、ナポリにあり、日本研究者の大多数はこの3校に集中している。他の諸地方では、ミラノ大学、ミラノ・ビコッカ大学、トリノ大学、ボローニャ大学、フィレンツェ大学、ベルガモ大学、サレント大学 (レッチェ市)、カタニア大学とラグーサ分校なども日本語日本文化のコースがあり、優れた研究者が活躍している。また、小規模だが、パヴィーア大学、ペルージャ大学、トゥーシャ大学にも日本語講座がある。

ヴェネツィア大学の日本語日本文化専攻の学部は3年間の定員制で、各学年は310人で、大学院生も入れると、1000人以上となり、国際交流基金が認めたヨーロッパの拠点として、最大規模の日本研究機関である。ローマ大学は学生数800人、ナポリ大学は400人ぐらいで、イタリアの日本語学習者総数は、国際交流基金の2014年度公開の日本語教育機関調査結果によると7420人で、そのうちの6069人は大学などの高等教育機関で学んでいる¹¹。

3. イタリアの日本研究の最新動向——大学を中心に

19世紀後半から現在に至るまで、イタリアの日本研究のテーマは時代とともに変化している。先駆者たちの東洋学、日本学、日本文化全般の研究から、専門分野の細分化があり、戦後からより専門的な研究が行われるようになった。常設の日本語講座は最近までは言語と文学が中心であったが、近年、日本語を主眼として、他の科目も専門細分化し成長してきた。2000年より始まった大学制度の大改革は、言語と文学の区別が形式・実質ともにより明確になり、他専門の自立をもたらし、認可させるきっかけとなった。これは、歴史、思想・宗教、美術、芸術などの他の学問にとっても大変良いことである。ただし、国立大学、国内の

10 L. Sabattoli 「アルス・ニッポニカ——昭和5年「ローマ展」と日本画へのイタリア側の批評」
Studi Italici 57(3) (2007) : 24-326.

11 <https://www.jpif.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/italy.html>.

研究機関は今後、多くの専門分野を発展させるための体制と予算が備えられるかどうかが問題である。

イタリアの文化史の伝統は、歴史的展望を中心とし、文献学、書誌学から文化変遷の中の言語、文学、歴史を対象とする研究が主流をなしてきた。現在でも外国語の学部は主に、諸国の言語とともに、かならずその国の文学史を教える仕組みになっている。日本語講座のある大学も例外ではなく、作家論、作品論などを中心とする日本文学研究はどの大学でも主役になっている。

ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学では現在、アジア・地中海アフリカ研究学科になっているが、日本学も多種多様な分野の専門家がいて、教員、若手研究者、院生などの研究は多岐にわたる。日本思想史、とくに徳川時代の思想、文化史、政治学、国際関係に関する博識のパオロ・ベオーニオ・ブロッキエーリ (Paolo Beonio Brocchieri, 1934-91) 教授から日本学が始まるが、教授がバヴィーア大学へ転勤後、アドリアーナ・ボスカロ (Adriana Boscaro) 教授が、ヴェネツィアの日本学の棟梁となり、キリシタン世紀とイエズス会宣教師の記録、豊臣秀吉などの研究、日本史から徐々に日本文学に移り、古典文学、平賀源内、谷崎潤一郎、遠藤周作などに関する幅広い優れた論文と翻訳を通して、現在の日本学の確固たる基盤を築いた。

イエズス会、キリシタンの研究から、古文書、日本語史へと広がったアルド・トッリーニ (Aldo Tollini) の研究活動は、ボスカロの流れの一部を汲み、仏教哲学、禅と道元、茶道の文化などへと展開し、貴重な著書を生み出している。他方、彼の弟子にヴァレリオ・アルベリッツィ (Valerio Alberizzi) がおり、古文書、国語史、文体史、仏教典などの漢文の古訓点などについて精密な研究を日本で続けている。

人類学においては、ブロッキエーリの後を継いだマッシモ・ラヴェーリ (Massimo Raveri) が日本の宗教、神道や民俗学、民間宗教、現代の新興宗教などに関する研究大家であり、国際的に活躍する弟子たち (Fabio Rambelli, Lucia Dolce, Federico Marcon, Erika Baffelli, Andrea De Antoni, Tatsuma Padoan など) を育ててきた。若手研究者ジョヴァンニ・ブリアン (Giovanni Bulian) は神島などの調査研究を行い、漁師の町村、日本の漁業、風、海などに関する独創的研究を続けている。

ボスカロの文学研究の後継者として、ルイーサ・ビエナーティ (Luisa Bienati) は作家論、作品論を通して、日本近現代文学史の入門書と専門書を刊行し、永井荷風、谷崎潤一郎、井伏鱒二、原爆文学などの研究と翻訳で注目され、実り多い

成果をあげている。古典文学においては、『住吉物語』『更科日記』『紫式部日記』などの翻訳と解説などを著しているナポリ大学出身のカロリーナ・ネグリ (Carolina Negri) である。若手研究者では、ピエラントニオ・ザノッティ (Pierantonio Zanotti) が小説を主流するイタリアの従来の研究と違って、和歌 (藤原定家) から近現代詩 (山村暮鳥、未来派、アヴァンギャルド)、現代のゲーム世界などへ関心を広げている。カテリーナ・マッツァ (Caterina Mazza) は現代文学のなかでも、井上ひさしのパロディー文学をはじめ、萩野アンナのような女性文学、多和田葉子のような2か国語で書く作家の作品などの新傾向に注目している。

日本語の分野においては、言語学と言語史から日本語の多方面 (明治時代の日本語、坪内逍遙から最近の言語現象まで) を捉えるパオロ・カルヴェッティ (Paolo Calvetti)、社会言語学から琉球諸語とアイデンティティの問題、周縁言語、消滅危機言語をめぐる多大な成果をあげたパトリック・ヘインリッヒ (Patrick Heinrich)、琉球語と音韻の問題に取り組んでいる若手研究者ジュセッペ・パッパラルド (Giuseppe Pappalardo) などがいる。

日本史においては、日本のファシズム、日本近現代史の政治問題と太平洋地域の国際関係の諸領域 (ヴェトナムなど) を扱うフランチェスコ・ガッティ (Francesco Gatti) の教え子ローサ・カーロリ (Rosa Caroli) も日本史、沖縄史、国際関係などについて業績をあげている。若手研究者に関しては、日本近現代史のなかで政府体制、政治経済と選挙との関連、農業問題などの研究者アンドレア・レヴェラント (Andrea Revelant)、歴史学から16世紀、17世紀のイタリア宣教師などの記録を通して見た日本の知識とイメージ、イタリアにおける和書、日本をめぐる書籍の調査研究などを行っているソニア・ファヴィ (Sonia Favi) が期待されている。

美術の分野では、日本美術と美学、浮世絵とその巨匠北斎、広重、歌麿などに関する多数の書籍を刊行し、キュレーターとして展覧会に直接携わったジャンカルロ・カルツァ (Giancarlo Calza) の後、ジャポニズムと浮世絵、葛飾北斎と広重などの基礎的研究を新鮮な感覚で紹介しているシルヴィア・ヴェスコ (Silvia Vesco) が代表者である。

ヴェネツィアで舞台芸術の分野を切り開いたのは、主に能楽、横道萬里夫などの能の構造分析をふまえた演劇学の研究に独創的な感覚を注いだパオラ・カニョーニ (Paola Cagnoni) である。その跡を継いだのは、ボナヴェントゥーラ・ルベルティ (Bonaventura Ruperti) で、人形浄瑠璃、近松門左衛門、近世演劇、近代文学 (泉鏡花の作品と戯曲)、日本舞踊、ドラマツルギーとしての演劇を扱う日本

演劇史の研究を続けてきた。また、舞踏やコンテンポラリー・ダンスの現場で研究しているカティア・チェントンツェ（Katja Centonze）も比類ない研究活動（日本現代文学、三島由紀夫と舞踏の関わり、舞踏、現代舞踊、モダンダンス、現代演劇など）を行っている¹²。

最近、学生の関心を集めている大衆文化については、ロベルタ・ノヴィエリ（Roberta Novelli）が映画史、日本映画と日本近現代文学、アニメに関する論文を多数刊行しているが、エウジェニオ・デアンジェリス（Eugenio De Angelis）のような有望な若手研究者も育ち、国際映画祭に参加しながら専門雑誌に評論を投書し活躍している¹³。三宅トシオ（Toshio Miyake）も社会学とカルチュラルスタディーズの視点から、マンガ・アニメ、若者文化、日本現代文学におけるイタリアのイメージ、イタリアにおける日本のイメージ、その変遷などの研究に貢献している。マルチェッラ・マリオッティ（Marcella Mariotti）は日本語、日本語教授法を研究しながら、社会学の視点から児童文学の研究し、イタリアでも大ヒットとなった『世界の中心で、愛をさけぶ』、『はだしのゲン』、童話集などの翻訳を数多く刊行している。また、東洋美術、仏教思想、韓国との交流などに焦点を当てる新しい研究を行っているクレメンテ・ベーギ（Clemente Beghi）も挙げられる。以上はヴェネツィア大学の研究者陣であった。

ミラノには日本語日本文化講座を設けている大学が三つあり、ミラノ・ビッコカ大学、ミラノ大学が主だが、私立のボッコーニ経済大学にも日本経済の専門家がいて、授業数は少ないが日本語講座がある。ミラノ・ビッコカ大学では、アンドレア・マウリツィ（Andrea Maurizi）が『懷風草』『新猿楽記』『浜松中納言物語』『落窪物語』などの古代文学や近世文学の『男色大鑑』の翻訳と解説を行い、多彩な活動を行っている。ミラノ大学では、シモーネ・ダッラ・キエーサ（Simone Dalla Chiesa）と、若手のティツィアーナ・カルピ（Tiziana Carpi）が人類学、社会問題に取り組みながら、日本語と言語学に力を入れている。ヴィルジニア・シーカ（Virginia Sica）は、三島由紀夫を中心に日本近現代文学のみならず、中世の五山文学の研究も行っている。ボッコーニ大学出身（現在ミラノ国立大学）のコッラード・モルテーニ（Corrado Molteni）は、カルロ・フィリップーニ（Carlo

12 実は、舞踏についての関心も高く、舞台やワークショップだけでなく、研究の面でも舞踊研究者、評論家マリア・ピア・ドラーツィ（Maria Pia D'Orazi）などの論文がある。

13 映画の分野では、日本映画専門の評論家ダリオ・トマーシ（D. Tomasi）がおり、国際映画祭（世界で一番古いヴェネツィア映画祭のほかに、日本、韓国、中国などの大衆映画を紹介する極東ウーディネ映画祭も人気を集めている）等に参加し、専門誌に批評、論文を書いている。

Filippini) とともに日本経済の専門家である。ほかに、日本美術の分野においては、写真美術と浮世絵¹⁴、デザインと美学などの論文を出しているカルツァの弟子ロッセツラ・メネガッツォ (Rossella Menegazzo) がいる。

ミラノ大学とともにトリノ大学において、西川一郎とともに最初から日本学、日本文学研究を築いたのはマリオ・スカリーセ (Mario Scalise) である。彼の父親 (グリエルモ・スカリーセ大将 Guglielmo Scalise, 1891-1975) は1934～39年のあいだ、日本に軍事担当として滞在し、暗き時代の中でも日本の文化に魅せられ、その後、伊日辞典 (1940年) や翻訳書を出版し、ミラノ大学で日本語日本文化を教えていた¹⁵。スカリーセ大将の婿サンテ・スパダヴェッキヤ大将も舅に感化を受け、日本の文化に熱中し、アジア文化センターを開設した。娘のニコレッタ・スパダヴェッキヤ (Nicoletta Spadavecchia) は現在、IsIAO アフリカ東洋研究所 (前身は1933年設立のIsMEO中亜極東協会) のミラノ分校で、日本語日本文化を教えながら、夏目漱石、大江健三郎の作品と土居健郎の著書の翻訳を出している。

トリノ大学には日本近現代文学の専門家で、三島由紀夫に傾倒しているエマヌエーレ・チッカレッタ (Emanuele Ciccarella) と、現代文学の翻訳 (大江健三郎から桐野夏生、高橋源一郎、古川日出男まで) を次から次へ出し、安部公房の演劇と現代文学を専攻するジャンルーカ・コーチ (Gianluca Coci) がいる。若手ダニエーラ・モーロ (Daniela Moro) はジェンダー文学、女流作家と演劇、円地文子、野上弥生子などについての論文を発表している。そして、ラヴェーリの弟子で日本思想史、京都派、西田幾多郎などの研究者マッテオ・チェスターリ (Matteo Cestari) は東洋哲学の担当者である。

ボローニャ大学では、外国語部と文学部が別れているが、言語学のフォルリー・キャンパス、音韻学専門の上山素子 (Ueyama Motoko) がおり、ボローニャ本校は新しい日本語教授法を取り入れる実験的研究と大衆文学、推理小説の翻訳をも

14 日本を撮影した初期の写真家フェリーチェ・ベアト (Felice Beato, 1832-1909) もヴェネツィア生まれで、横浜を拠点にその後活躍したアドルフォ・ファルサーリ (Adolfo Farsari, 1841-1898) もヴィチエンツァ生まれで、イタリア人である。

15 和伊辞典は、バルトロメオ・バルビの初期のもの (1939年) の後、ヴァッカーリ (Oreste Vaccari, 1886-1980) の辞書と文法 (1956年) も出版されている。その後、マリオ・スカリーセも文法と漢字辞典を出している。ヴェネツィア大学では、久保田陽子が執筆した『現代日本語文法』(Grammatica di giapponese moderno, Venezia, Cafoscarina, 1989年) は画期的なもので、今でも重宝されている。また、ローマ大学ではMastrangelo, Ogawa, Saito, *Grammatica giapponese* (Milano: Hoepli, 2006) も刊行されている。最近の出版としては、ミラノのSusanna Marino, *Grammatica pratica di giapponese* (Zanichelli, 2008) とSimone Guerra, *Grande dizionario giapponese-italiano dei caratteri* (Milano: Zanichelli, 2015) も貴重である。

行っているフランチェスコ・ヴィトゥッチ (Francesco Vitucci) と、近現代文学、女流文学、映画について幅広い活動を繰り広げているパオラ・スクロラヴェッツァ (Paola Scrolavezza) がいる。ほかに、日本学専門ではないが、ボローニャ大学舞台芸術学科のジョヴァンニ・アッザローニ (Giovanni Azzaroni) と弟子マッテオ・カザーリ (Matteo Casari) は、演劇の専門家として、歌舞伎、能、伝統演劇の伝承方法、実際の稽古体験を、人類学的方法を用いて研究している¹⁶。ボローニャ大学の文学部の日本語担当は竹下敏明である。ほかに、菊川英山などの浮世絵の研究を残した近藤映子、ボローニャの東洋美術センターを統率するジョヴァンニ・ペテルノッリ (Giovanni Peternolli) は文献資料を提供し、展覧会を企画する機関における日本美術の専門家である。

この分野では、ジェノヴァのキョッソーネ東洋美術館館長ドナテッラ・ファイッラ (Donatella Failla) が、素晴らしいコレクションを活用しながら、ジェノヴァ大学でも教え、優れた研究を続けている。その活動からは、大学人のみでなく、直接作品にふれる他分野の研究でも大事な役割を果たしているといえよう。

フィレンツェ大学の文学部の日本語日本文化講座は、チベット研究の第一人者ジュゼッペ・ツッチィ (Giuseppe Tucci, 1894-1984) に次ぐ東洋学者で、アイヌ、海女の研究の草分け的かつ魅力的な存在だった人類学者、登山家、写真家、ジャーナリストのフォスコ・マライーニ (Fosco Maraini) によって創設された。現在の教員に、『万葉集』、『古今和歌集』の伊沢と、和歌文学から近代詩歌 (萩原朔太郎など) まで優れた研究成果をあげている鷺山郁子 (Sagiyama Ikuko) と、和歌、物語文学、中世文学、『方丈記』、『蜻蛉日記』等の翻訳に取り組んだフランチェスカ・フラッカーロ (Francesca Fraccaro) がいる。若手のエドアルド・ジェルリーニ (Edoardo Gerlini) は和歌と漢詩の影響関係、菅原道真、イタリア中世の詩歌と和歌との比較などを通して、斬新な研究を行っている。フィレンツェには、浮世絵のコレクターと愛好家、美術の専門家マルコ・ファジョーリ (Marco Fagioli) がロンドンなどよりも早く、1977年からほとんど毎年日本の春画の本、カタログ、解説書などを数多く出版し、展覧会にも携わっている。

ローマのラ・サピエンツァ大学には、『源氏物語』の初の伊語訳を行い、古典文学から近現代文学 (夏目漱石、石川淳、太宰治など) まで研究し、多大な成果を

16 日本演劇については英語から翻訳したベニート・オルトラーニや演劇学の専門家ジョイア・オッタヴィアーニの著書がある。Benito Ortolani, *Il teatro giapponese, dal rituale sciamanico alla scena contemporanea* (Bulzoni, 1998); Gioia Ottaviani, *Introduzione al teatro giapponese* (Usher, 1994).

上げているマリア・テレサ・オルシ (Maria Teresa Orsi) がいた。それを継承するマティルデ・マストランジェロ (Matilde Mastrangelo) は幕末と明治の文芸、森鷗外と歴史小説、近代文学と落語、講談、三遊亭円朝と怪談についての論文を発表してきた研究者である。また、ジョーヤ・ヴィエンナ (Gioia Vienna) は現代文学、女流作家などの作家研究を続けている。若手のルーカ・ミラーシ (Luca Milasi) は坪内逍遙、幸田露伴を、ステファノ・ロマニョーリ (Stefano Romagnoli) は戦争文学 (火野葦平) と紀行文学を、それぞれ研究している。また、ローマ大学出身のロベルタ・ストリッポリ (Roberta Strippoli) は中世文学、物語、御伽草子などの翻訳と研究を行い、現在アメリカで活躍している。

日本史専門家として、マルコ・デルベネ (Marco Del Bene) は日本史、近現代史におけるメディア、新聞、ラジオ、歌謡曲、映画の役割についての研究をしている。日本美術史を担当するダニエーラ・サドゥン (Daniela Sadun) と、日本近現代文学、芥川龍之介、女流文学、伊日交流を研究してきたテレサ・チャッパローニ・ラ・ロッカ (Teresa Ciapparoni La Rocca) は上記のストラミジヨリの教え子である。

日本の音楽の専門家には、日本とアジアの楽器、『源氏物語』における音楽、神楽などの研究をしているローマ大学のダニエーレ・セステイーリ (Daniele Sestili)、現代音楽の作曲家、能の音楽とフルクサス (Fluxus) のようなアヴァンギャルドなどの研究をしているトリノー出身のルチャーナ・ガッリアーノ (Luciana Galliano) もおり、大変貴重な存在である。日本思想史、古文書、仏教、宗教などの研究でナポリとローマで活躍していたシルヴィオ・ヴィータ (Silvio Vita) は今日本在住である。

ナポリ東洋大学では、上記の日本文学研究の先駆者マルチェッロ・ムッチョーリを受け継いで、日本美術、日本史、日伊交流などの多彩な研究を繰り広げたアドolfo・タンブレロ (Adolfo Tamburello) が多くの弟子を指導してきている。現在日本語担当の大上順一 (Ōue Jun'ichi) とシルヴァーナ・デマイオ (Silvana Demaio) がそれぞれ比較言語学、日伊言語の比較と日本語、明治史、御雇外国人を研究している。

文学研究においては、ジョルジョ・アミトラノ (Giorgio Amitrano) が日本近現代文学、特に中島敦、吉本ばなな、村上春樹、井上靖の研究と翻訳を通して紹介し、業績を上げ、若手のキアラ・ギディーニ (Chiara Ghidini) は古典文学と宗教思想を、ジュセッペ・ジョルダーノ (Giuseppe Giordano) は『新古今和歌集』を、クラウディア・イアッツェッタ (Claudia Iazzetta) は能を、ガラ・フォッラ

ーコ (Gala Follaco) は永井荷風から近現代文学までを研究し、論文を出している。

政治学部の担当者は、日本史、日本政治史、日本の国際関係に関する視野の広い論文を著したフランコ・マッツェイ (Franco Mazzei) とその弟子ノエミ・ランナ (Noemi Lanna) である。ほかに、イギリスの東インド会社、日本・中国の関係史、海洋貿易と海賊をめぐる研究をするパトリツィア・カリオーティ (Patrizia Carioti) がいる。

コモ市の大学には日本史研究の若手ティツィアーナ・イアンネッロ (Tiziana Iannello) がおり、サルデーニャ島のサッサリ大学では日本史専門家パオロ・プッディヌ (Paolo Puddinu) も活躍している。レッツェ市のサレント大学には、古代文学、『万葉集』、『唐物語』、日本文学と漢文学との関係を研究するマリア・キアラ・ミリオレ (Maria Chiara Migliore)、古代文化、『常陸風土記』の翻訳、馬をめぐる文化と言葉の研究をしている若手のアントニオ・マニエーリ (Antonio Manieri) がいる。

シチリア島のカタニア大学とラグーサ分校では、パオロ・ヴィッラーニ (Paolo Villani) が『古事記』、本居宣長、神話などを、ルーカ・カッポンチェッリ (Luca Capponcelli) が萩原朔太郎、与謝野晶子の近現代詩を取り上げている。

5. 研究現状と動向——大衆文化への関心

以上、イタリアの大学と研究機関で研究活動を行っている日本学の研究者と研究テーマを概観し、あらゆる分野で専門的知識と豊富な研究成果を上げていることが実感できる。北欧諸国と違って、近現代の文化現象のみならず、古典研究も重要な基盤となっていることが明らかに窺える。それに合わせて学生の教育も、現代語を初め、漢文、和文などの古文に対する読解力とともに、文学、宗教、歴史などの他分野でも古代から一通りの研究をする体制を持ち続けて、しっかりした基礎をもつ学習者、若手研究者、柔軟性のある人材を育てることを重視している。古典研究のできる人材は、現代研究も兼ねてできるが、逆の方向はうまくいかないようである。そのため、古典資料の読解力と古典研究の能力を育て、歴史変遷にともない絶えず変化する物事の本質、細部、全体像を把握し、通時的知識、歴史的展望、厳密な解釈と想像力、柔軟性と総合性を育成することに努めてきたといえよう。

それにしても、今の日本はヨーロッパと同じように政治体制・経済の多種多様な問題を抱え、不景気や停滞、不振に苦しんでいるのに、イタリアでは日本文化に大きな関心をもって大学で日本語を学ぼうとする学生の人数が依然として減ら

ないのはなぜであろうか。

著しい経済発展の高度成長の絶頂を経てきた日本ではあるが、今やヨーロッパ諸国、アメリカと並び、優れた伝統、洗練された美的創作の付加価値、高度の資質を備えた豊かな文化を提供する国となって、人の心を惹きつける魅力に溢れ、より安定した時代に入っているといえる。むしろ、経済成長を支えてきたのは、高水準の文化力、就学率、教育と学問の普及、知識と教養、芸術と技術に対する関心、精密性と厳格性をもつ繊細な精神と感性なのではないか。他方、それに反して、実用主義・功利主義に傾きがちな経済発展が、時には文化のいろいろな側面を犠牲にしてきたのも、否めない事実である。

喜ばしいことに、文化のあらゆるレベルでも国際的に認められてきたのは、日本に対する注目度が高いと言える。日本現代文学も徐々にイタリアの読者に馴染みのあるものとなり、日本料理もイタリアの一般の消費者・美食家にとってちょっとした流行になっている現在、日本文化の魅力に触れられる分野が増え、多彩な芸術現象をもつ大衆文化が主役となっている。

十何年前から、ヴェネツィア大学に限らず、イタリアの大学の日本語学科の学生に日本語学習の動機を尋ねると、日本のマンガ、アニメを通してなんとなく日本文化に興味をもったと答える学生が多い。若い世代のアニメ・マンガへの関心は、言うまでもなく、幼少時から日本のアニメ・テレビ番組から受けて来た感化による。大学進学になると、単なる趣味というレベルを超え、意識的に日本文化に近づいていき、興味も関心も研究も多彩化していく。実際は、若手研究者のレベルになると、やはり、大衆美術から高級文化までバラエティに富む日本のマンガ・アニメの膨大な世界にとどまらず、他の研究テーマに関心を広げているようである。

これと同時に、映像文化についての学術的洞察を示す著書も出ている。日本漫画史、漫画・アニメ辞典、漫画家論（手塚治虫、宮崎駿など）、作品論にジャンル・ルーカ・ディ・フラッタ（Gianluca Di Fratta）などの研究もあれば、日本漫画やアニメの根底にある世界観についての考察であるパドヴァ大学の美学研究家マッシモ・ギラルディ（Massimo Ghilardi）の *Cuore e acciaio*（Esedra, 2003）がある。また、さらに広い視野で、現代日本社会の諸異相への関心を示しているのは、1990年代から出てきた研究書である。たとえば、アレッサンドロ・ゴマラスカ（Alessandro Gomarasca）、ルーカ・ヴァルトルタ（Luca Valtorta）編の *Sol mutante*（Costa e Nolan, 1996）、ゴマラスカ編の *La bambola e il robottone...*（Einaudi, 2001）がある。イタリアで根づいた歴史的展望という学術伝統から、より社会的

な視野に移って現代日本を見直そうとする動きが窺える。そのような研究者側の動向と共に、読者・一般享受者の嗜好、関心も変化してきたと言える。

日本美術の典型的テーマ、浮世絵の世界、ジャポニズムが代表するヨーロッパ美術との影響関係に関する研究が相変わらず主流をなす一方、日本美術の新しい側面に注目し、日本古美術の知識や学力をもつ研究者も増えている。これと同時に、日本のアヴァンギャルド、デザイン、コンテンポラリー・アートを含む多岐にわたる日本現代美術の創作活動にますます好奇心を示す専門家も増えつつある。展覧会の都度に刊行された論文集を含むカタログ、一般読者向けの解説、より専門的に問題を取り上げる研究も若手研究者から生まれつつある。

国際的に高く評価され、活躍している日本人の中で、建築家（丹下健三の時代から、安藤忠雄、黒川紀章、磯崎新、伊東豊雄、妹島和世、隈研吾など）はもちろん、美術（村上隆）や、舞台美術を楽しみながらファッション界の先端に立っているスタイリスト（三宅一生、山本耀司等が代表人物）の活躍ぶりも、若手研究者の注目を浴び、研究の対象になっている。日本の伝統的染色、織物、着物の技術、色、文様、美学などの研究と展覧会も現れ、確かに見逃せない日本美術の一面である。

いままでイタリアの出版社は、小説の翻訳や人類学的なジャーナリズム以外、一般読者を対象とする日本に関する論文集や学術書を発行しなかった。しかし最近、日本文学、日本史、日本美術、日本の思想と宗教、各分野に関する専門書も大手出版社から発行され、かなりの読者層が日本文化に関心をもっていることを証明している。

また、日本学専門研究ではないが、日本文化、芸術に興味を示している著者、学者もかなり多くなってきている。一般享受者も、研究者、専門家も、他分野との関わりを無視できず、学際的な共同研究を好む傾向が生まれている。さらに、限られた地域を超え、中国、韓国を含むより広い範囲の中で一つの分野を捉える姿勢も著しくなっている。日本のみでなく、東アジアのなかで同じ現象や多種多様な側面をつかめば、日本への理解も深まるため、示唆に富む比較研究が広がっている。

マルチメディア時代のいま、映像・音響の多次元を通して訴える表現方法が好まれる趨勢にあるのは確かである。ネットのサイトにおいて、アジアの映画、アニメ、演劇、舞踊などが専門家によって紹介され、研究資料および年表、批評、論文など充実した情報を提供するものが現れているため、思いもよらぬ勢いで認知され、専門誌にも評価されている。

イタリア日本研究学会（伊日研究学会、AISTUGIA）¹⁷は、イタリアの日本研究を促進する目的で1973年に創立されて以来、日本研究者、学生のみならず、日本に関連する各方面の社会人、日本に真摯な関心を抱く一般人等を集合する方針を堅持している。現在、400名以上の会員を擁し、イタリア最大の学会組織として、年次研究会、論文集発行を初めとする活発な活動を展開している。研究会は毎年行われ、年々発表者が増える一方である。それに応えて、3日にわたる学会のスケジュールも分野別に分かれ、研究発表が同時進行で行われている。若手研究者が多くなっただけでなく、研究テーマや専攻もバラエティに富んでいる。若手研究者の積極的な参加、ますます深まる専門知識による研究細分化と充実性が一番際立っている。

それとは別に、比較研究の観点から毎年異なる研究課題を扱う学会、シンポジウムも各大学、各機関において開催され、文学、歴史、社会、宗教、思想、美術、演劇、音楽などの境界線がなくなって、日本に関わる人文科学領域全般を対象とし、他分野の専門家をも交えた大変興味深い内容となり、実り多い成果をあげている。

近代国家になった日本とイタリアとの国交樹立は1866年8月25日だったので、2016年は国交開設から150年目にあたる。日伊交流150周年のために、イタリアおよび日本各地で文化事業を中心にいろいろな行事、催し物が実施されている。

伊日両国は、450年近い交流があった。「国と国との関係とは、詰まるところ人と人との関係です。（……）日伊両国及び両国民の相互理解が一層促進され、かつ、二国間関係の新たな展望が拓かれる契機となることを期待」¹⁸できる時代になった。時代の長い流れは人間の劇的な出会いを包み込んでいる。近代になってから、それぞれの国の文化への理解と知識が深まり、文化活動、文化研究、人文科学の今までの研究の積み重ねのおかげで、人間交流が見事にできるようになっている。今後の研究も美しい花を咲かせることが期待できるだろう。

遊楽万曲の花種をなすは、一身感力の心根也（世阿弥『遊楽習道風見』）

17 <http://www.aistugia.it/>

18 在イタリア日本国大使梅本和義の「ご挨拶」。

<http://www.it.emb-japan.go.jp/150/jp/saluto.html>